

7月に実施した SSH 事業教員アンケートには、45名の先生方から御回答をいただきました。今回は、その結果から見えてきた本校 SSH の「現在地」を整理してみます。

① 日々の授業には、SSH の目指す方向と重なる変化が見え始めています



SSH 指定後の変化について質問したところ、次の項目では肯定的な回答が比較的多く見られました。

- ・ 根拠に基づいて考え、表現する活動を意識するようになった 75.6%
- ・ 自分の教科と他教科・他分野とのつながりを意識するようになった 66.7%
- ・ 生徒が自ら考える活動を授業に取り入れようとする意識が高まった 60.0%

日々の授業の中でも、「根拠をもとに考える」、「自ら考える」、「異なる分野とのつながりを見る」といった、本校 SSH の目指す学びと重なる変化が少しずつ生まれていることがうかがえます。

② 一方で、「その取組が SSH とどうつながるのか」は、まだ見えにくいようです



一方、SSH 事業全体とのつながりについては、肯定的な回答が必ずしも多くありませんでした。

- ・ SSH 事業の目的や方向性が教職員に共有されている 46.7%
- ・ SSH 事業と日常の授業・教育活動とのつながりが分かる 37.8%
- ・ 生徒の探究活動を学校全体で支える体制が整っている 42.2%
- ・ 他教科の教員と、生徒の学びや授業について話す機会が増えた 48.9%

自由記述でも、「どの活動が SSH 事業のものなのかが分からない」、「『文理融合』がどのようなものなのか明確になっていない」、「担当していないと、何をしているのか、何が課題なのか分かりにくい」といった趣旨の御意見が寄せられました。

SSH の目指す方向と重なる授業改善は少しずつ進んでいる一方で、それらが SSH 事業全体の中でどのような意味をもつのか、十分につながって見えていないことが、現在の課題の一つだと考えられます。

③ これから必要なのは、「新しいことを増やす」ことよりも「つなぐ」こと



今回の結果を受け、「もっと SSH のための取組を増やさなければならない」とは捉えていません。例えば、[根拠をもとに考えさせる]、[異なる考えや資料を比べさせる]、[他の単元や教科とのつながりを意識させる]、[生徒自身が問いをもつ場面をつくる]といった活動は、すでに多くの授業の中で行われています。

今後、大切なのは、すでに先生方が日々の授業や教育活動で取り組まれていることを、BUN-petency や「学びのアクション」といった本校の SSH の枠組みや考え方とつないで捉え、学校全体で共有していくことだと考えています。

自由記述では、探究を担当する教員への負担の集中や、指導の目標・方法についての共通理解を求める声もありました。全員が同じことを行うのではなく、それぞれの教科や立場で行っている教育活動が、どのように本校の SSH 事業につながっているのかを見えるようにすること。それが、「全校体制」の一つの形なのかもしれません。

今回いただいた御意見をもとに、BS 版でも今後、これまで紹介してきた取組を振り返りながら、「本校の SSH は何を目指しているのか」、「日々の授業や教育活動とどのようにつながるのか」を、より具体的に整理していきたいと思います。